

---

# ヴェンデッタ

鈴木さら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴェンデッタ

### 【Nコード】

N1856A

### 【作者名】

鈴木さら

### 【あらすじ】

暗い街、寒い部屋、痛み、姉と弟。

指先が冷えている。

弟は、まるで冷たい目をして

「殺そう」

と言った。

母は泥酔して床に転がっている。

散々暴れて、部屋の中はめちゃくちゃ。

椅子の足が一本折れて、晩ご飯に食べるつもりだったスープはもうない。鍋だけがごろりと転がっている。

「また、父さんが怒るね」

弟がぼつりと言った。真っ赤な顔をして私達を殴り付ける男が、たやすく浮かんだ。

寒い部屋。

「殺そう」

弟が母を見下ろしながら言う。私は母を見下ろしていた目をあげる。

「殺そう」

私は、まるで彼と心が一つになった様な気分で、彼が母を背負うのを手伝った。

アパートメントの凍り付いた階段を、私と弟はゆっくり登る。

十六段。

母が、口の中で呟いたうわ言さえ聞き取れる程、辺りは静かだった。

「もし、これで駄目だったら」

口にした言葉は白くなって空中に散った。

私と弟は、正体を無くしている母を左右から支え、  
「何度でもやり直せばいいよ。ここは六階だから、何度でも」

微笑み合いながらそんな会話をした。

私と弟の間に、言葉はいらなかった。

私達は、二つ揃ってやつと一つだった。

さよなら、と私と弟はそっと呟いて、ありったけの力で母を階段に放り投げた。

私達は二回、それを繰り返して、動かなくなった母を置いて晩ご飯の為に家を出た。帰って来ると、アパートメントは騒然としていた。

私達は人だかりを掻き分けて部屋に戻り、警察官に母の死を告げられた。

「ああ、なんてことなの、ヴィネ、ギノ」

近所の老婦が私達に駆け寄って、大声で言う。

ええ、おばさん。なんてことかしら。

私達、晩ご飯の用意の為に買い物に行っていたの。

ギノを留守番にさせていればよかったわ。こんなことになるなんて。

ほんとうに、なんてことかしら。

父は、葬儀から数日はおとなしかった。

酒は飲まず、薬を飲んでは部屋の隅で壁に向かって何か呟いていた。

私は母が殴った肩の痣を弟に見せる。

「少しだけ薄くなってる」

弟は父が押し付けた煙草の痕を私に見せる。

「痛む？」

「だいぶ楽だよ」

私達は二つで一つ。

父が弟を殴り出したのは、一週間ほど過ぎた日からだった。内側に向かせていた薬が、溜まり込んで外側に向かせる。

弟は声を出さない。

出せばまた殴られる。

私は、頃合を見て間に割って入る。

そうすれば、次に殴られるのは私で、弟は致命傷は避けられる。

口汚なく、私と弟と神を罵りながら、父は濁った目で機械の様に殴り付ける。

弟が、ナイフを持つのが目に入った。

ああ、私達はこの時を待っていた。

幼い手足が力を蓄え、残酷に刻まれた痛みが復讐という名を持つこの時を。

この時を。

e n d .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1856a/>

---

ヴェンデッタ

2011年1月25日03時55分発行